

『朱子家礼』の中国近世文化史における位置

楊 志 剛

(森本亮介訳)

一 はじめに

安川所長、諸先生方、友人の皆さん。本日は関西大学東西学術研究所において発表をおこなう機会を与えられ、たいへん光栄に存じます。関西大学に参りまして数ヶ月の間、こちらの研究員の方々とさまざまな形で交流を行なうことで、理解を深めることができただけでなく、教えられるところがまことに多かつたと思います。本日、改めて皆様と学問を論じる機会を設けていただいたことを、非常に貴重なものと感じています。より多くのご指摘ご批判を賜われれば幸いに存じます。

本日のテーマは主に一冊の本、すなわち『朱子家礼』に関するものです。この書はまたの名を『文公家礼』といい、単に『家礼』ということもあります。この南宋に現われ、後世広く流伝し大きな影響力を持った書物を、私は「民間の通用礼」と位置づけています。宋元時代から近代中国に至る社会生活の変化と発展を論じる場合、

『家礼』の存在を無視することはできないというのが私の考えです。『家礼』とその伝播、影響を究明しなければ、この時代の礼俗、家族、ひいては文化の発展変化にかかわるさまざまな問題も、明確にすることはできないでしょう。しかし残念ながら、現在、中国の学界において、かくも重要な書物に注目する人はまだきわめて少ない状況にあります。朱子学研究者においても、本書はしばしば見過ごされています。そのため、一九八六年に私が『朱子家礼』を修士論文の研究対象として選び、関連する研究文献（ここでは中国の文献に限りません）を探しはじめた時も、『朱子家礼』を専門的に扱った論文は一篇も探し出せませんでした。

その後、状況はいくらか変化し、八〇年代末から九〇年代初めにかけて、北京大学の陳来教授や当時蘇州大学教授だった束景南教授が論文を発表して『朱子家礼』を考察しましたが、作者の問題を論じるにとどまっていました。

これらの状況に鑑みて、本日の発表は『朱子家礼』を検討の中心

に据えることにしました。しかし、限られた時間の中でできるだけ多くのことを述べるためには、まず始めに中国の礼学研究の現況を簡単に紹介する必要があると思われる。

二 中国における礼学研究の現状

五四運動以後、中国の思想界は常に「礼」を批判の対象とし、また「礼」を放棄することで中国文明を新生させようと試みてきました。その影響を受けた結果、中国の現代学術史において礼学は弱い分野となり、はなはだしくは「礼学」という言葉自体が封建社会の残滓と同一視されることもあって、ほとんど問題にされなくなりました。

八〇年代末からこの状況に変化が起こり（特に中国大陸において）、礼学研究に復権の兆しが見え始めました。九〇年代に入ると、この兆しはますます顕著になっていきます。いくつか例を挙げますと、次のようになります。

- 一、博士、修士論文のテーマに礼学に関係するものが次第に増えていること。
- 二、礼学に関する著作が各地で出版されていること。その中には、北京学苑出版社から『二十世紀中国礼学研究論集』（陳其泰主編、一九九八年六月）が出版されました。この書物の編集目的は、「二十世紀における礼学研究の成果をより体系的に映し出

し、これを総括するとともに、未来の世紀のさらなる研究のために基礎を提供する」（同書「編選例言」）とされています。三、北京師範大学に中国礼学研究センターが設立されました。当センターが企画編集する『中国礼学大辞典』はまもなく出版の予定です。

四、礼学および礼学史の研究対象、基本的範囲、全体的な枠組について検討がなされ始めていること（拙稿「中国礼学史発凡」参照、『復旦学報』一九九五年第六期。『二十世紀中国礼学研究論集』にも収録）。

三 近年における『朱子家礼』研究の概況

近年における『朱子家礼』の主な研究には以下のものがあります。

(a) 中国

1. 束景南「朱子《家礼》真偽辨」、『朱子学刊』第五輯
 2. 陳来「《朱子家礼》真偽考議」、『北京大学学報』一九八九年三月
 3. 楊志剛「《司馬氏書儀》和《朱子家礼》研究」、『浙江学刊』一九九三年第一期
- 楊志剛「《朱子家礼》…民間通用礼」、中華書局編『伝統文化与現代化』一九九四年第四期
- 楊志剛「《朱子家礼》在韩国的流传与影響」、『朱子学刊』第八輯

(b) 日本

吾妻重二『家礼』の刊刻と版本——『性理大全』まで、『関西大学文学論集』第四八巻第三号

この労作は『家礼』の刊刻と版本の問題について、非常に深く精密に研究しています。

一つ言及しておかなければならないことは、今世紀において日本の学者が『朱子家礼』の研究にきわめて重要な貢献を残したということです。中国でこの書がほとんど忘れ去られていた時期に、日本の一部の学者は関心を払い、阿部吉雄先生、上山春平氏先生らは、『朱子家礼』の専論を発表しました。

(c) アメリカ

Patricia Buckley Ebrey, *Chu Hsi's Family Rituals: A Twelfth-Century Chinese Manual for the Performance of Cappings, Weddings, Funerals, and Ancestral Rites*. Translated, with Annotation and Introduction, Princeton University Press, 1991.

これは『朱子家礼』の初めての英訳であり、解説と注釈が付されています。訳者イーブリー氏は、アメリカのイリノイ大学の教授で、『朱子家礼』の他に『袁氏世範』(Princeton University Press, 一九八四年、解説・注釈付き)も翻訳しています。これは同じく南宋に現われ、近世中国の社会生活に大きな影響をもたらした書物です。作者は袁采といい、『世範』というこの小冊子の中で、処世の原則と

『朱子家礼』の中國近世文化史における位置

行為の規範を定めています。

『朱子家礼』、『袁氏世範』などの漢籍の英訳は、西洋の中国学における中国歴史文化研究の新しい方向性、新しい視野をよく示しています。

四 『朱子家礼』の真偽問題

——現存する最古の版本を例証として

清の王懋竑が『家礼』は朱熹の作ではないと主張し、『四庫提要』がその説を採用して以来、『朱子家礼』の真偽問題は論じられなくなりました(このことも『家礼』が現代の学者にほとんど論及されない原因の一つでしょう)。清の夏忻は朱熹が『家礼』の作者であると強く主張し、後に錢穆は『朱子新学案』の中で夏忻の説に賛同しました。先に述べた陳来先生、束景南先生、吾妻重二先生らの論文は、『家礼』が朱熹の作であるという説に賛成、あるいは賛成の方向にあるようです。私自身も『家礼』は朱熹の著作であろうと考えています。

ここで一つ版本上の証拠を挙げておきます。これは直接『家礼』の作者問題に関わるわけではありませんが、比較的重要な間接的証拠です。現存する最も古い『家礼』の版本は、北京図書館善本室に所蔵されています(編号八五二、五巻、附録一巻。そのうち一巻から三巻までが清代の影宋抄本なので、抄本を配した宋刻本)。版心の下方に次の刻工の姓名が記されています。徐珙、王鶴、何彬、馬良、

張元瑑、沈宗、蔡仁、顧祺、徐典、徐珍、徐倫。最後の三名は特定できませんが、他はすべて南宋中期の杭州の刻工です。『家礼』の初期の刊刻情況については、次のことがわかっています。(1)嘉定四年(一二二一年)、広州における刊刻。(2)嘉定九年(一二二六年)、趙師恕が杭州で刻したもの。(3)淳祐五年(一二四五年)、杭州における刊刻。これは五卷本、附録一卷で、北京図書館蔵の『家礼』は、この一二四五年刊本の系統に属するものと推測されます。このように、一二二一年から一二二六年、さらに一二四五年という時期は朱熹の死後がそれほど時間を隔てておらず、朱熹に最も近かった人物(たとえば朱熹の門人)からも、朱熹が作者であることについて疑問は出されていません。このことは、『家礼』が朱熹の自作がであることの重要な証拠になると考えられます。

五 士庶通礼と唐宋社会の変化

『明集礼』は、次のように指摘しています。「漢晋以来、士礼は廃れて講ぜられず。唐宋に至りて乃ち士庶の通礼有り」。ここにいう「士礼」とは、主に『儀礼』『礼記』中に記載されている礼儀制度を指します。しかし「士礼」は繁雑すぎるため、社会の変化にともなうて、その適用範囲は次第に狭くなりました。唐宋時代に至って、簡略化され整理された家庭における礼儀制度が現われ広まってからは、その適用対象は一般の士大夫や庶民に移ってきました。彼らは宋代以後の礼制度では士庶階級に相当するために、「士庶の通礼」というわ

けです。士庶の通礼が「士礼」にとつて代わり、実際の生活の上で指導的な役割を果たすようになります。その中でも『書儀』『家礼』の影響が最も大きく、これらは完全な形で後世に伝わりました。

士庶の通礼は唐代に現われ、宋代にまともになりました。これは、門閥貴族が歴史の舞台から降り、社会構造と階級制度に変化を生じたことと関係があります。後漢以来、厳格に存在していた士族と庶民との壁が、唐代以降次第に崩れ始めます。科挙制度の確立が庶民の政治参加に大きな前進を促したのです。七八〇年に頒布された兩税法には、「人に丁中(階級の差)無く、貧富を以て差と為す」と明言されています。門閥貴族の影響力や地位が低下するにつれて、士人と庶人の地位が向上し、その結果、士庶の生活にかなった礼儀制度が必要とされるようになります。このことが重要な原因となって士庶の通礼が出現したのです。

唐宋五代の激動を経て宋代に至ると、士族と庶民との間の境界は、現実においても人々の觀念においても、基本的に消えてしまいました。たとえば、婚姻問題はそれまで「礼の本」と見なされていましたが、宋代には「婚姻は閥閥を問わず」とされ、士族と庶民の通婚が許容されるようになります。これに応じて、士族と庶民の社会的地位が礼制上において最終的に認められ、確立されます。宋の徽宗時代に制定された『政和五礼新儀』の中では、『唐開元礼』にはなかった士庶の礼儀、すなわち「庶人冠儀」、「庶人婚儀」、「庶人喪儀」が現われ、「礼、庶人に下る」という一大転換を成し遂げました。『宋史』礼

志においても、歴代正史の礼志で初めて、士庶の結婚・葬儀について記述が与えられました。輿服志の中でも、「士庶人の車服の制」「臣庶の室屋制度」について記されています。宋代以降、礼制は社会の構成員をおおまかに三つの階級、すなわち皇室王族、品官、士庶とに分けています。まさにこのような背景のもとで、「士庶の通礼」は宋代に発展し整備されたのです。¹⁾

中国史上、唐宋時代の間起こった一連の重大な変化については、私は内藤湖南先生が『概括的唐宋時代観』の中で述べた「唐代は中世の終わりであり、宋代は近世の始まりである」という見方に賛成です。士庶通礼の出現と完成は歴史の変化の一つの側面を表わしています。したがって、私は司馬光の『書儀』と『朱子家礼』、とりわけ後者の出現を一種の特別な社会現象と見ています。これらの出現は近世中国文化の発端をなす重要な標識の一つなのです。

六 『朱子家礼』の影響力

——近世の家族構成の発展を例として

『家礼』が日常の道徳と礼節制度を再度定めたその目的は、長幼に序列があり、貴賤に区別があるという理想的な生活方式を中国の家族において確立しようとしたためでした。人々の言行や生活に規範あらしめ、冠婚喪祭すべてにわたって一定のきまりに従わせることで、家族と社会に秩序をもたらそうとしたのです。しかし、『家礼』の意義はこれだけにとどまりません。当時、門閥階級にもとづく宗

法・宗族制はすでに解体し、家族組織はまさに変化しつつありました。どのように家族組織を作り上げ発展させていくか、宋代の儒者の間にはさまざまな議論があつたのです。朱熹は家族における礼という視点から、みずからの構想を提示しました。その中で最も建設的な案が『家礼』における「祠堂〔祖先をまつる廟〕」の設計でした。

朱熹は「祠堂」章を『家礼』の巻頭に置きました。朱熹の自注によると、それは「本に報い始めに反るの心、祖を尊び宗を敬うの意」を際立たせるため、「覽る者をして先ず大なる者を立つ所以を知らしむる」ためであり、さらに「凡そ後篇の、周旋昇降、出入向背する所以の曲折にも、亦た抛りて以て考うる所有り」としています。『家礼』を通覧すると、祠堂が家族の活動全体の中心施設として位置づけられていることがわかります。これは、祠堂が家族の存在と家族の団結を維持する精神的支柱であることを表わしています。

『家礼』の祠堂制度において最も深意をうかがわせる点は、祖先祭祀を「宗子の法」や族産の設置と結合したことです。周代において宗法制と分封制は互いに依存していましたが、先秦時代の、制度としての宗法制は早く滅びました。しかし、大宗（本家）と小宗（分家）を区別する基本原則、すなわち「別を繼ぐを宗と為し、禰を繼ぐを小宗と為す」、「大宗は百世遷らず、小宗は五世にして則ち遷る」という思想は、深い影響を残しました。宋代に家族組織の再構成が開始されたとき、「宗子の法」を復活させ、これを理論の中心にすえ

て主張をおこなった者がいました。蘇洵、蘇軾、歐陽修、張載らが「宗子の法」を実行に移す考えを世に問うたのです。

もちろん、古代の「宗子の法」がそのまま復活できるはずはありません。しかし「復古」という旗印のもとで、「宗子」(実際には族長もしくは家長)を選ぶことでその権力と地位は強化され、それが「宗を敬い族を取める」効果をもたらしました。これは、封建社会後期における家族組織の発展変化の新しい重要な特徴となります。「家礼」もまた「宗子の法」を提唱し、しかも抽象的な理想と原則を具体的な祠堂制度の中に組み込んだのです。

『家礼』は宗子による祭祀権と族産の保持を強調し、祠堂を通じて家族の安定と子孫の繁栄を維持していこうとしました。このような制度は、以後の家族の活動においても運用され発展しました。これらの特徴とすることで、いわゆる「宗祠(本家の廟)、支祠(分家の廟)から家長にいたる宗族システム(族権)」、(毛沢東「湖南農民運動視察報告」)が中国史上に形成されていきました。まさに朱熹は、近世の家族制度のために、よく整った精密なプランを案出したのです。朱熹は後世形成された家譜には言及していませんが、それ以外の祠堂、族田、祭祀、家法、族長など近世の家族制度を形づくる主要な要素は、『家礼』の中にすべて言及されています。つまり、後世の家族制度は、ほぼ朱熹が設計したモデルをもとに形成されたのです。

七 『朱子家礼』の伝播とその結果

『家礼』は、世に出てから封建的家族礼制の模範として尊ばれました。朱熹の門人黄幹は、その「家礼の後に書す」という文章で次のように述べています。すなわち、『家礼』の記述は「天理の自然、人事の当然に非ざる無なくして、一日も欠くべからざるなり。之を見ること明らかに、之を信じて篤く、之を守ること固ければ、礼教の行わるること望み有るに庶し」と。

しかし、『家礼』が中国封建社会後期に民間の通用礼となったのは、さらに二つの重要な要素があります。一つは国家が意識的にこれを尊重したこと、もう一つは『家礼』の注釈と伝本が数多く刊行されたことです。ここにいる注釈、伝本とは、『家礼』に注釈を加えたもの、補訂を加えたもの、平易な言葉に変えたもの、さらには挿図を加えたものなど、『家礼』の名のもとに出版され流布した家礼関係の著作すべてを含みます。これらの注釈や伝本によって朱熹の礼学思想は広く伝播し、『家礼』は誰もがよく知る書物となりました。元代には、楊復、劉堦孫、劉璋の三人の注を合わせた『文公家礼集注』が刊行されました。

明治初期、儒学は朱子学の独壇場となり、国家から民衆に至るまで、朱子の名声は揺るぎないものとなりました。同時に、『家礼』の地位も日増しに上昇していきます。洪武元年(一三六八年)、政府は「民間の婚娶は、並びに朱子家礼に依れ」(『明会要』礼九)という勅

令を発します。洪武三年には『明集礼』が成り、『家礼』の内容を多く採用します。さらに永楽年間には「文公家礼を天下に頒布する」(『明史』礼志) ことになりました。

これらのことを背景として、明代には『家礼』に関する数え切れないほどの注釈や伝本が世に出回ることになるのです。

清代の人々も『家礼』の注釈、伝本を引き続いて著わしていますが、明代ほど熱心には行なわれませんでした。そのなかで比較的重要なもの、王復礼の『家礼弁定』、郭嵩燾校訂の『朱子家礼』、汪佑編訂の『朱子家礼』、李元郎の『家礼拾遺』などです。『家礼』は、清代においても依然として高く評価されていました。汪佑は、「家礼は人家の日用に無かるべからざるの書なり」といい、郭嵩燾は『家礼』と鄭玄の『三礼注』を並挙して、「二千年、天下法守と相い為すは、独り康成(鄭玄)及び朱子の書のみ」と述べています。

それ自身もつ多くの長所により、また国家権力やかくも多くの文人儒者の宣伝と推薦を通じて、『家礼』は社会生活に非常に大きな影響をもたらすことになったのです。⁽³⁾

『中国地方志民俗資料匯編・華北卷』(書目文獻出版社、一九八九年)を例にとってみましょう。この書に収録する北京、天津、河北地区の冠婚喪祭関係の資料を見ると、三十二に及ぶ州県の地方志が「均しく『文公家礼』に遵う」、「率ね『文公家礼』の如くす」などと記しています。所載の礼俗がおおむね『家礼』に符合している州県はもつと多く、華北地方ばかりか、他の地区の地方志においても『家

礼』を遵奉しているという記述は至るところに見られます。たとえば『嘉靖常德府志』(湖南)の風俗の条には「人家の喪祭は頗る『家礼』に依る」とあり、『万曆新昌縣志』(浙江)第四卷の風俗の条では、「大率ね『文公家礼』を用う」と記されています。

つまり、士庶の通礼の代表作として、『家礼』は明清時代に「民間の通用礼」という性格を強めたのです。私個人の印象としては、明清時代の間、『家礼』が社会生活の面で果たした影響と役割は、儒家の文献のうちで『論語』に次ぐものと考えられます。しかし、『論語』がただ行為の原則を示すだけなのに対して、『家礼』はさらに、具体的にどのような事を運ぶべきかを我々に教えています。

最後に一つつけ加えておきます。一九九五年秋に私は中国江西省の婺源(朱子の祖籍の所在地)で開かれた朱子学シンポジウムに参加しましたが、この討論会と並行して「世界朱氏宗親会」が開かれました。私はその場で、朱子の後裔の一人が、父親が亡くなったときにすべて『朱子家礼』の順序に従って葬儀を行なった、と話しているのを聴きました。それが事実であるかどうかはともかく、このことは、今日においても一部の人の間では『家礼』がなお影響力を保っていることを物語っているのです。

註

(1) 以上、拙稿「司馬氏書儀」和「朱子家礼」研究。また「礼、庶人に下る」の問題については、拙稿「礼下庶人、的歴史考察」(『社会科

- 学戦線」一九九四年第六期）を見られたい。
- (2) 拙稿「宋明文化与近代化關係析論」(『復旦学報』一九九四年第三期)を参照。
- (3) 拙稿「朱子家礼」・「民間通用礼」参照。

The Position of *Chu Hsi's Family Rituals* in Pre-Modern Cultural History of China

Yang Zhigang

Chu Hsi's Family Rituals was regarded as a work of spurious authorship, but through the recent research work in China and Japan, it has been made almost evident that it was written by Chu Hsi himself. When we discuss the changes and the development of social lives from Song-Yuan period to modern China, we cannot neglect *Chu Hsi's Family Rituals*. As a result of the rise of the status of ordinary officers and common people, some manners and etiquettes appropriate for their lives became necessary. In order to meet this requirement, Chu Hsi wrote the '*Family Rituals*'. It gave a huge impact on the society, and the pre-modern family system is considered to have been formed based on the model designed by Chu Hsi. In other words, *Chu Hsi's Family Rituals* as the most important work on 'popular rituals of ordinary officers and common people' played a major role as 'civil rituals' in the pre-modern Chinese society. It should be noted that the impact still remains on some people in the present time.